

対人関係によるあいづち表現の使用傾向の違い —シラバス構築の一助として—

李 舜炯

1. はじめに

近年、日本語教育では、隣接する分野、特に社会言語学を取り入れながら「方言、若者言葉、性差(ジェンダー)、文体差(スタイル)」など日本語のバリエーションを扱おうとする考え方や動きが盛んになっている。たとえば、2007年発行の『日本語教育』134号での特集、「日本語のバリエーションと日本語教育」に掲載された一連の研究が挙げられる(杉戸2007、鈴木2007、高木・丸山2007他)。

その中でも特に、コミュニケーションや自己表現において大きな役割を果たしている日本語のスタイルに関する研究は大きな注目を浴びている。渋谷(2008:19-20)は、スタイルを考えるときには個々のスタイルを特徴づける具体的な言語項目に注目する必要があるとし、「人称詞(自称詞、対称詞)、推量形式(デショとダロ・ヤロ・ベ)、否定形式(ナイとネー・ン・ヘン)、終助詞・間投助詞(ネとノ・ナ・サなど)、丁寧語(デス・マスなどの使用・不使用)、あいづち(ハイとウンなど)、……」などを提示している。ここから、本稿で注目しているあいづち表現も、ほかの言語項目と同様にスタイルとして機能することが窺える。すなわち、あいづち表現は自然談話のなかで使用頻度も高く、多種多様なあいづち表現が相手や場面によって使い分けられているということである。

そこで、本稿では、日本語教育でシラバスとして取り上げられることの少なかった丁寧体と普通体のあいづち表現に焦点を当て、大学生・大学院生が初対面同士の会話のなかで、対話相手が年配かどうかによる使用傾向の違いを男女別に明らかにすることを目的とする。実際、初対面の場面では何をどのようにいえば良いのか分からず、精神的負担が大きいため、相手に関係なく丁寧体あいづち表現の使用が予想されるが、使用実態に基づいた日本語教育を考える際には、対人関係を考慮した上で、量的な調査だけではなく質的な分析も必要となるだろう。

2. 先行研究の検討および問題の提起

日本語のあいづち表現は日常会話で使用頻度が高く、使用される表現形式も多様で、円滑なコミュニケーションのために必要な要素の一つと考えられてきただけに、その研究成果も多い。本節では、本稿と関連があるあいづち表現の丁寧体と普通体のスタイルおよび対人関係について言及した研究を検討しその問題を提起する。丁寧体と普通体のスタイルとして機能するあいづち表現に関する研究としては、窪田(2000)、内藤(2003)、大塚(2013)などが挙げられる。

窪田(2000)は、日本語学習者が若者、年配者という異なる年代の日本人との会話においてそれぞれどのような「あいづち表現」を使用しているのか、その習得状況と待遇性の問題について分析した。その主な結果は次の四点である。①初級・上級学習者

いずれも年配者に対して「丁寧体あいづち表現」の使用割合が増加する。②初級・上級学習者いずれも若者に対しては、より多く「普通体あいづち表現」を用い、逆に年配者に対しては「丁寧体あいづち表現」を多く用いる。③習得状況をみると、上級になっても「丁寧体あいづち表現」の使用率が非常に低く、年配者に対して待遇性を考慮して「あいづち表現」を使用することができない学習者もいる。一方、初級学習者でも年配者に対する「丁寧体あいづち表現」の使用率が大幅に増加している場合もある。④待遇性の問題点として「そう系」のあいづち表現を使用する際、待遇性の低い形で使用している。

内藤(2003)は、専攻またはサークルが同じである大学生・大学院生同士の日本語母語話者と JFL 環境にある韓国人日本語学習者の日本語会話において、どのようなあいづち表現がどの程度使用され、どのような場合にスピーチレベルのシフトが起こるのかを検討し、次の三点を結果として提示している。①あいづち表現のスピーチレベルについては、日本語母語話者ではほぼ一定してカジュアルスタイルであったのに対し、韓国人学習者は一定していない。②レベルシフトについては、日本語母語話者の場合、わずかではあるが会話の開始部と何らかの談話の単位の終結部にレベルシフトが起こる。③韓国人学習者についてはレベルシフトが多くみられたが、そこに顕著な傾向を見出すことはできなかった。

大塚(2013)は、初対面の3人会話における文体シフトの効果をディスコース・ポライトネスの観点から分析を行い、次の二点について指摘している。①あいづちを打つことは聞き手への共感を誇張することになるので、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである。②普通体のあいづちのほとんどは、独話的に打たれたものである。

次に、あいづち表現と対人関係に関しては、大浜(2002)が挙げられる。

大浜(2002)は、社会的地位や性の異なる対人関係(同年代：年上、同性：異性)によってあいづちの使用頻度や表現にどのような変化が現れるのかを調べ、次の九点をその結果として示している。①「うん」、「あー」、「繰り返し」などがその使用の5割以上を占める。②あいづち表現の使用頻度は、どの相手グループに対してもほぼ一定である。③年上より同年の相手に対して、あいづち表現以外の発話が多くみられる。④異性の相手と同性の相手にはあいづち表現以外の発話の量に違いはみられない。⑤あいづちの使用数と表現の種類数は比例している。⑥年上の相手には賛同する表現(あ系、そう系、本当系)の使用が多く、対同年では違和感を表明し自らのターン取得のシグナルを送る「え系」が多く使用される。⑦年上には丁寧な「はい系」が多く、同年にはくだけた「うん系」が多く使用される。⑧同性には同意賛同の「本当系」の使用が多く、異性には相手の発話を重視する「あ系」及び「え系」が多く使用される。⑨あいづち表現には「あ系+α」の形をとる一定のルールがある。

以上のような先行研究を検討すると、初対面の母語話者のあいづち表現や話す相手が年配かどうかによって見られる男女別の使用傾向に着目した研究はそれほど多くはないようである。具体的には次の三つの課題が考えられる。

①日本語学習者の場合は、使用されるあいづち表現の丁寧度が、相手が年配かどう

かによって異なる(窪田 2000)と報告しているが、日本語母語話者の場合は、どのような使用傾向があるのか。

- ②年上には丁寧な「はい系」が多く、同年代の相手にはくだけた「うん系」の使用が多い(大浜 2002)というが、性別による使用傾向の違いはみられないのか。
- ③普通体のあいづち表現のほとんどは独話的に打たれもの(大塚 2013)と指摘されているが、独話的でない場合はどういう用法で使われるのか。

3. 本稿におけるあいづち表現の定義および分類

本稿では聞き手言語行動であるあいづちを、「話し手が発話権を持っている間に聞き手が送る短い発話」と定義する。これは従来の水谷(1988)、堀口(1988)、松田(1988)、メイナード(1993)などと同様の定義である。また、李(2014:78-80)は、これらの従来の研究を踏まえて、あいづち表現を聞き手言語行動の一種類として扱っている。具体的には「あいづち表現、繰り返し、言い換え、先取り」を取り上げ、あいづち表現については特に、①意味内容が認められない感性的で概念を指さない感性的表現(はい、ええ、うん、へーえ…)と、②意味内容が認められる概念的表現(そうですね、そうですね、なるほど、すごい…)に再分類している。本稿ではこの分類に則って、丁寧体と普通体というスタイルとして機能するあいづち表現の観点から、以下の表1のように分類した。

表1 本稿におけるあいづち表現の分類

1. 丁寧体と普通体のスタイルの対応があるあいづち表現		
	丁寧体あいづち表現	普通体あいづち表現
A.感性的	はい系(は、はーはー、はあ、はいはい…)、ええ系(え、えー、ええ、ええええ…)	うん系(うー、うん、んー、うーん、うんうん…)
B.概念的	そうですね系(そういうことです、そうなんです、そうなんですよ、そうだったんですか、そうですね、そうですね、そうなんです、そうなんですよね…) そうですね系以外(本当ですよ、本当ですよ、すごいですね、いいですね、いいんじゃないですか、でしょ、ですね、ですよ)	そう系(そう、そうそう、そうだよ、そうなんよ、そうかね、そうか、そっか、そっかそっか、そうね、そうよね、そうやね、そうやな、そうだね…) そう系以外(本当、本当に、本当だよ、いいよ、いいじゃん、いいね、だろう、だろうね、だよ、ね…)
2. 丁寧体と普通体のスタイルの対応がないあいづち表現		
A.感性的	あ系(あ、あー、あーあ、あーあー、あーは) ふーん(ふーん、ふんふん)、へー(へーえ、へーえ)、ほー(ほー、ほーほー)	
B.概念的	いや、いやいや、なるほど、なるほどなるほど、確かに、確かに確かに…	

まず、あいづち表現を普通体と丁寧体の対応の有無により、「普通体と丁寧体の対応があるあいづち表現」と「普通体と丁寧体の対応がないあいづち表現」に二分した後、さらにA.感性的あいづち表現と、B.概念的あいづち表現に分類した。次に、あいづち表現の丁寧度によって、それらをさらに、丁寧体あいづち表現と普通体あいづち表現に分類した。

4. 研究の方法

本節では、研究の方法として、使用データの概要及び調査の目的について述べる。

4.1 使用データの概要

本稿では「相手が同性であるか、異性であるかはあいづち表現や発話の頻度には影響しない(大浜2002:4)」という指摘に基づき、『改訂版基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ) (宇佐美2011)』に収録されている20代前半大学生・大学院生をベースにした「初対面同性同士雑談(男・女)」の会話データを調査資料とした。詳細な概要は以下の表2 のとおりである。

表2 使用データの概要

[協力者の記号; B(F/M):ベース話者(女/男), S(F/M):同等(女/男), O(F/M):目上(女/男)]

NO	グループ	会話番号	協力者	発話		あいづち				
				時間	出現数	出現数		下→上	上→下	
1	同等女性 同士	191	JBF01-JSF02	16/27 秒	358	1387	241	1016		
2		193	JBF02-JSF02	17/01 秒	414		332			
3		195	JBF03-JSF02	11/39 秒	257		202			
4		197	JBF04-JSF02	15/43 秒	358		241			
5	同等男性 同士	199	JBM01-JSM02	15/44 秒	239	1427	231	1142		
6		201	JBM02-JSM02	18/23 秒	413		266			
7		203	JBM03-JSM02	15/52 秒	250		214			
8		205	JBM04-JSM02	19/57 秒	525		431			
9	上下女性 同士	192	JBF01-JOF01	16/29 秒	365	1474	227	1145	93	134
10		194	JBF02-JOF01	18/32 秒	394		335		124	211
11		196	JBF03-JOF01	17/ 0 秒	334		304		149	155
12		198	JBF04-JOF01	17/03 秒	381		279		105	174
13	上下男性 同士	200	JBM01-JOM02	17/06 秒	218	1089	147	723	73	74
14		202	JBM02-JOM02	16/14 秒	301		180		103	77
15		204	JBM03-JOM02	20/58 秒	256		173		88	85
16		206	JBM04-JOM02	18/10 秒	314		223		103	120
総数				272/18 秒	5377	5377	4026		4026	
平均				17/00 秒	336	1344	252		1007	

4.2 調査の目的

以下の2点を明らかにすることを調査の目的とする。

- a. 丁寧体と普通体のスタイルの対応があるあいづち表現の場合、男女の性別によって、丁寧体あいづち表現と普通体あいづち表現の使用がどう違うのか。会話参加

¹ 「あーなるほどねー/確かにそうですね/あ、へー」のように、形式の異なるあいづちが重なる場合は、それぞれ別のあいづちとして分類し、その数をカウントした。ただし、「そうそうそう」「確かに確かに」のように同形のあいづちが重なる場合は、一つのあいづちとして分類し、その数を数えた。また、平均17分前後の発話時間、グループ間の同一人物を相手にもかわらず、発話数に偏りがある理由の一つとして一発話の長さが考えられる。実際、4グループのうち、上下男性同士の場合、発話数は少ないが、一発話が長いことが分かった。さらに、日本語のあいづちは発話のターン交替と関連性が高いので、基本的には発話数とあいづち頻度が比例する可能性は高い。しかし、日本語のあいづちの特徴の一つとして、相手の発話の途中でのあいづちなど、発話のターン交替に関わらないあいづちが存在する。したがって、発話数が必ずしもあいづち表現数に影響するとは限らないと思われる。

者の社会的地位の上下関係(年齢の上下)による違いも合わせて調査する。

- b. 丁寧体と普通体のスタイルの対応がないあいづち表現の場合、どのような使用特徴があるのか。男女の性別によって、その使用にどのような違いがみられるのか。会話参加者の社会的地位の上下関係(年齢の上下)による違いも合わせて調査する。

5. 分析と考察

本節では、4.のような調査に基づき、20代前半の大学生・大学院生の対人関係によるあいづち表現の使用傾向を実証的に分析、考察した。特に、対話相手が許酒かどうかによってあいづち表現をどう使い分けているのかに注目し、性別ごとに調査、分析した。丁寧体と普通体のスタイルの対応があるあいづち表現について、5.1では対話相手が同年代の場合の、5.2では対話相手が年配の場合のあいづち表現の使用傾向を分析、考察した。初対面という負担のある堅苦しい場面であるため、一貫した丁寧体あいづち表現の使用が予想されたが、異なる対人関係で使用されるあいづち表現の使用実態はそれとは異なっていた。

5.1 対話相手が同年齢(同等)の場合のあいづち表現の使用

本節では対話相手が同年代の場合のあいづち表現の使用傾向をみるため、「同等女性同士」と「同等男性同士」グループの使用傾向を比較考察した。図1の下のグラフの同等女性同士の場合は、白で示した「うん」系による感性的普通体あいづち表現の使用が31.4%で最も多く、上のグラフの同等男性同士の場合は、黒で示した「はい」系、「ええ」系による感性的丁寧体あいづち表現の使用が30.7%で最も多いことが確認できた。

表3 同等男性同士と同等女性同士のあいづち表現の使用

対人関係 あいづち表現	同等女性同士	同等女性(B)	対同等女性(S)	同等男性同士	同等男性(B)	対同等男性(S)
感性的丁寧体	10.9	12.1	10.5	30.7	29.8	29.9
概念的丁寧体	6.9	4.9	8.1	10.5	11.9	10.0
感性的普通体	31.4	37.4	27.7	11.3	11.4	11.6
概念的普通体	9.9	9.0	10.5	2.8	2.7	2.4
感性的	37.2	32.5	39.8	40.3	40.0	41.6
概念的	3.6	4.1	3.3	4.4	4.4	4.5

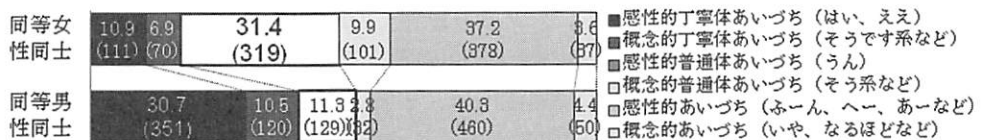


図1 同等男性同士と同等女性同士のあいづち表現の使用傾向

ここで、具体的な会話例を見てみたい。次の例文(1)には、同等女性同士の自然談話に現れた「うんうんうん」、「そうそうそう」など、感性的、概念的普通体あいづち表現が確認できる。例文(1)の波線部のような普通体あいづち表現を多用することにより、

相手と良好な関係を保つために仲間意識を示し、相手との心的距離を縮めようとしたことが窺える。

- (1) 会話例 195、同等女性同士の会話、BF, SF: 同年齢(同等)女性
- 207-2 BF3 東アジアの(うんうんうんうん)、なんかカレー講義の(うんうんうん) 言語の、あれとってて。
- 210 SF2 もしかしてそれ、2年生の時にとりました?
- 211 BF3 とりました。
- 212 SF2 あ、じゃー、緒だ 私も2人で笑い。
- 213 BF3 そうそう、写真見ましたよね
- 214 SF2 見ました、見ました>{<。
- 215 SF2 <ね>{<、やっぱりね そのときだ うんうんうん
- 216 BF3 スライドで、なんか(うんうん)、他の授業<みんな眠ってる>{<のに、あの授業だけ笑ってたって感じの<笑いながら>。
- 217 SF2 <そうそうそうそう>{<。

一方、同等男性同士の会話では(2)の派線部の「はい」、「はいはいはい」、「ですよね」、「そうですそうです」のように、感性的・概念的丁寧体あいづち表現を多用することで相手との距離を保持し丁寧さを保とうとしていることが確認できた。

- (2) 会話例 205、同等男性同士の会話、BM, SM: 同年齢(同等)男性
- 314 BM4 もう、「大学名2略称」もともと、「駅名6」に=。
- 315 SM2 =ですよね。
- 316 BM4 はい。
- 317 SM2 そうですそうです。(重略)
- 450 BM4 あの、飯盛山?。
- 451 SM2 あー、でしたっけ、はいはいはい<笑い>。
- 452 BM4 白虎隊の。
- 453 SM2 あー、はいはい、そうです(はい)。

これまで女性の方が一般に「丁寧さ」に対して敏感であると言われてきた(Ide and McGloin1991)。宇佐美(2006)は日本語や英語だけではなく諸言語において「男性に比べると、女性は、柔らかく、丁寧に、あまり断定しないで、同意をもとめるような話し方をする(2006:31)」と指摘している。今回の調査での、初対面の大学生・大学院生の同等女性同士のあいづち表現の使用傾向は、宇佐美のこれらの指摘とは相反する結果となった。また、近年、敬語の使用や文末のスピーチレベルなどを対象にした研究(宇佐美2001、三牧2002、吉岡2004など)において「若い層を中心に、上下関係にとられない気さくで、対等な人間関係を志向する傾向がある」という指摘がある。今回の同等女性同士の使用傾向はこれらの研究とおおむね一致する結果となったが、同等男性同士は丁寧体あいづち表現の使用が多いことが示され、従来の研究とは異なる結果となった。すなわち、若い層を一括りにせず、男女別に分けて考えた場合は、異なる

使用傾向がみられるということである。

5.2 対話相手が年配の場合の性別によるあいづち表現の使用

本節では対話相手が年配の場合のあいづち表現の使用傾向をみるため、「上下女性同士」と「上下男性同士」グループの使用傾向を比較考察した。次の図2と3は、年齢および社会的地位(大学生か対教師・社会人か)の差がある上下女性同士、上下男性同士のあいづち表現の使用状況を示した上で、下の立場の話者(目下)と上の立場の話者(目上)が用いるあいづち表現の使用状況をさらに詳細した。

まず、次の図2の上下女性同士の場合から見てみよう。全体的傾向としては、白で示した感性的普通体あいづち表現の使用が目立つ。しかし、吹き出しの中に示した目下女性のグラフをみると、使用頻度が高いものから順に、「感性的普通体あいづち表現(23.8%)>感性的丁寧体あいづち表現(23.1%)>概念的普通体あいづち表現(12.7%)>概念的丁寧体あいづち表現(11.3%)」という結果になった。このような結果から、対話相手が年配の場合、目下女性は目上女性に対し丁寧体であれ普通体であれ、感性的あいづち表現(46.9%)をより多く使用する傾向があることが分かった。

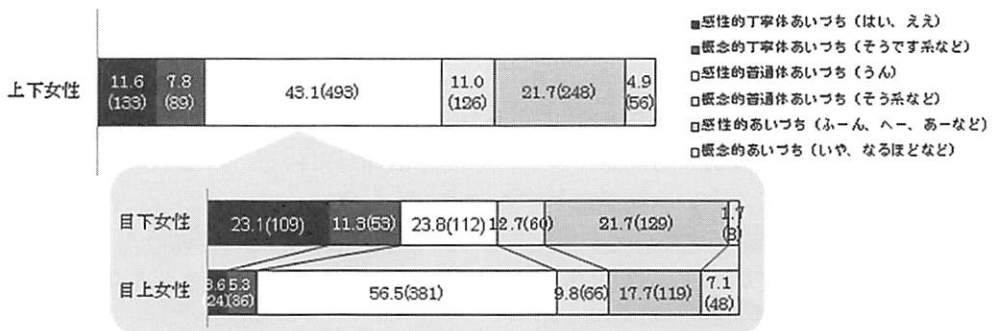


図2 年配に対する年下女性のあいづち表現の使用状況

具体的には、次の会話例(3)、(4)からも分かるように目下女性の場合、目上女性に対し初対面という堅苦しいそれも目上の対話相手という負担の度が増した場面で、「はい」系、「ええ」系や「うん」系の感性的あいづち表現を多用していることが分かった。

特に会話例(3)の目上の1660Fの発話では「ええええええ」の感性的丁寧体あいづち表現を反復することによって同意の程度を強調し相手に伝達していることが窺える。

(3) 会話例 194、上下女性同士の会話、BF：年下女性 OF：年上女性

162 JOF01 私、1番最初は、(はい)あの、それこそ家電メーカーで、(はい)うん、勤務してたんですけど。

163 JBF02 あ、そうなんですか。

164 JOF01 うん、10年弱くらいね<笑い>。

- 165 JBF02 へえー。
 166 JOF01 そう、でも、(はい)その時はー、うん…やっぱり景気がよかったからか、
 すごい大量に採用されてたんですね(ええええええ)、うん。

また、次の会話例(4)の目上 I330F の「～自分も勉強になりますよね」という発話に対する目下 I34BF のあいづち、「うんうんうん」は、実際音声を受けていると反復はしているものの声が高くなっているわけでもなく、聞き手の存在を意識せず相手の話に自分の中で納得したことを示していることが分かる。感性的普通体あいづち表現「うんうんうん」が独話的な用法で使われている一例である。これは、その次の 136 における目下の BF の自己納得を表すあいづちである「そっか」に繋がっていて、これも同様に対話相手に自分の意図を伝達しているわけではないようである。

- (4) 会話例 192、上下女性同士の会話、BF：年下女性 OF：年上女性
 133 JOF01 うん、そのほうが、うん、なんかやっぱり自分も勉強になりますよね。
 134 JBF01 <うんうんうん>。
 135 JOF01 あ、だから『間違えるんだ』、とか(うん)ねえー、うん。
 136 JBF01 そっか。

さらに、感性的普通体あいづち表現「うんうんうん」は次の会話例(5)でも確認できる。この場合は目上が目下の相手にあいづちを打っているが、先ほどの会話例(4)とは異なり目下の発話に対する同意と理解の態度を伝達している。49-2BF の「～中国から来てる人多いんで」という発話に対する「うんうんうん」は「分かる、そうだよ、多いよね」の意味を伝えている。また、52-1BF の発話に現れる「うんうんうん」も「あなたの話し聞いているよ、話を続けて」という意図を伝えていることが窺える。

- (5) 会話例 196、上下女性同士の会話、BF：年下女性 OF：年上女性
 49-2 BF3 同級生、中国から来てる人多い(くんで)。
 51 OF1 <うん>うんうんうん。
 52-1 BF3 こう、横で喋ってるのを聞いてはいるんですけど、(うんうんうん) なんかあんまり、すごくみんな日本語が上手な(うん)私は日本語で返すという
 すごいよく分からない
 53 OF1 分かり(く)ます、分かり(く)ます。

つまり、会話例(4)(5)で目下と目上を使う「うんうんうん」の感性的普通体あいづち表現はその形式は同様であるが、その使用機能は、前者が「独話的」であるのに対して、後者は「理解・同意」であるというように、幾分異なっていることが分かった。

日本語教育で活用の際には、このような上下女性同士の会話にみられる感性的普通体あいづち表現の使用傾向について、形式と機能を共に言及する必要がある。

一方、次の図 3 の上下男性同士の場合、全体的傾向としては、黒で示した感性的丁寧体あいづち表現の使用が目立つことが分かった。そして、吹き出しのグラフの中に

示した目下男性が用いているあいづち表現をみると、「感性的丁寧体あいづち表現 (28.1%) > 概念的丁寧体あいづち表現 (22.1%) > 感性的普通体あいづち表現 (16.3%) > 概念的普通体あいづち表現 (1.9%)」の順に多くなっている。

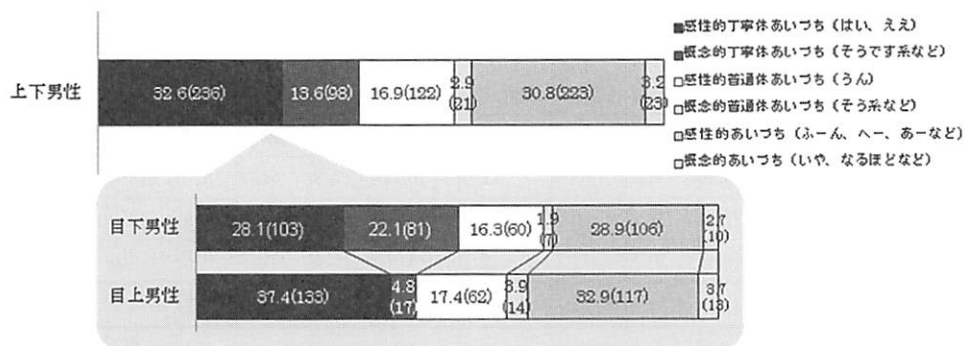


図3 年齢に対する年下男性のあいづち表現の使用状況

このような結果から、目下男性は目上男性に対し、感性的であれ概念的であれ、丁寧体あいづち表現 (50.2%) をより多く使用する傾向があることが分かった。目下男性の場合目上男性に対し、初対面という心的に堅苦しいそれも目上の対話相手という負担の度が増した場面で、「はい」系、「ええ」系、「そうです」系の丁寧体あいづち表現を使用することにより円満な人間関係を維持していることが窺える。

今回、対話相手の同等、上下による男女の違いについて、ブラウンとレビンソン (1987) のポライトネス理論の観点からその背景を考えてみたい。まず、同等女性同士の自然談話に現れた「うんうんうん」、「そうそうそう」などの感性的、概念的普通体あいづち表現使用が多い傾向は、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー4 の「仲間うちであることを示す指標を用いよ (Use in-group identity markers)」に該当するものと考えられる。普通体あいづち表現を多用することにより、相手と良好な関係を保つために仲間意識を示し、相手との心的距離を縮めようとしているのである。いわゆるポジティブ・ポライトネスを尊重する態度として理解できる。また、男性同士の「はい」、「そうです」、「すごいですね」、「ですよ」などの丁寧体あいづち表現の多用については、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー5 の「敬意を示せ (Give deference)」で説明できる。相手と一定の距離をおき、相手との摩擦をさけ、相手を尊重する態度で、良好な人間関係を築こうとしていると考えられる。

ここで、韓国の2大学生の日本語学習者のための大学教材11種を調査対象に教科書のあいづち表現の種類と出現頻度を分析した⁴⁾ (李 2011) に注目すると、「「はい」のあいづち表現が最も多く、「そうですか (117 例)」のあいづち表現がその次に多い (李 2011: 343)」と報告されている。このような日本語教育の現場事情を勘案すると、今回明らかになった結果から、初対面 20 代の同等男性同士の会話であれ、上下男性同士会話であれ、日本語教育に活用する際には、現行のとおり丁寧体あいづち表現による会話構成で問題はなからう。

5.3 丁寧体と普通体のスタイルの対応がないあいづち表現の使用傾向

本節では、次の表の二重線() の下の部分にあたる丁寧体と普通体のスタイルの対応がないあいづち表現に注目して、その使用状況について見てみたい。

表4 丁寧体と普通体のスタイル対応がない場合のあいづち表現の使用 (%)

対人関係 あいづち表現	同等女	同等	対同等	同等男	同等	対同等	上下女	年下	年上	上下男	年上	年下
	性同士	女性(B)	女性	性同士	男性(B)	男性	性同士	女性	女性	性同士	男性	男性
感性的丁寧体	10.9	12.1	10.5	30.7	29.8	29.9	11.6	23.1	3.6	32.6	37.4	28.1
概念的丁寧体	6.9	4.9	8.1	10.5	11.9	10.0	7.8	11.3	5.3	13.6	4.8	22.1
感性的普通体	31.4	37.4	27.7	11.3	11.4	11.6	43.1	23.8	56.5	16.9	17.4	16.3
概念的普通体	9.9	9.0	10.5	2.8	2.7	2.4	11.0	12.7	9.8	2.9	3.9	1.9
感性的	37.2	32.5	39.8	40.3	40.0	41.6	21.7	27.4	17.7	30.8	32.9	28.9
概念的	3.6	4.1	3.3	4.4	4.4	4.5	4.9	1.7	7.1	3.2	3.7	2.7

丁寧体と普通体のスタイルの対応がない場合は、「あ」系と「ふーん、へー、ほー…」など、感性的あいづち表現の使用が目立つ。注釈1で述べたように、異種のあいづち表現が重なる場合、それぞれ分けて分類した。その中でも「あ、なるほど」、「あーうんうん」など、「あー」との組み合わせが最も多く、グループ間の使用数の偏重が少なく、ほとんどのグループで高い割合で使用されているのが特徴的である。

ここで具体的な使用例を見てみたい。次の例文(6)にみられる「ふうーん」、「へえー」、「へー」などは、「興味・関心の表示または感情の表示による「感情を表出する」機能を果たす(李 2014:80)」とされているあいづち表現である。

(6) 会話例 191、同等女性同士の会話、BF, SF : 同年齢(同等)女性

127 BF1 で、2人1部屋。

128 SF2 ふうーん、えー、じゃあスウェーデン語少しできるんですか?。

129 BF1 うん、ちょっと、(へえー)もう忘れちゃった。

130 SF2 へー、そうなんだ。

131 BF1 うん、ほんと。

132 SF2 いいなー。

初対面という負担のある堅苦しい場面で、同等女性は、興味・関心の表示することの多い「ふうーん」、「へえー」、「へー」など、より親密な関係で使われる感性的あいづち表現をより多く使用することにより、相手との良好な関係を保とうとしているようである。これはポライトネス・ストラテジーとの関連から取り上げると、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー2の「H(聞き手)への興味、賛意、共感を誇張せよ(Exaggerate interest, approval, sympathy with H)」に相当する。

また、上記例文(6)の□の「そうなんだ」「うん、ほんと」「いいなー」は2節の課題③で指摘した、「独話的用法の普通体あいづち表現(大塚 2013)」に該当する普通

体あいづち表現である。ここでは、大塚の指摘通りに独話的に用いられているのか、違う用法があるのかについて検討したい。

129BFの「うん、(スウェーデン語が) ちょっと(できたけど)、もう忘れちゃった」という情報の提示に対する130SFの「へー、そうなんだ」は、理解・納得を示す独話的用法というよりは確認を聞き手BFに示していると読み取れる。もし、ここで相手の「忘れちゃった」という控えめの相手発話に対し、そのまま納得の態度をしめしたらかえって相手に失礼になるだろう。吉田(1998)は「そうなんだ」を「確認」の表現効果をもつあいづち表現とし、「聞き手に関することがらについて聞き手本人の目の前で自ら納得して見せて、そのことを以て聞き手への確認ともする表現である(吉田1988:51)」と述べている。また、ザトラウスキー(1993)は「「そうなんだ」「そうか」「ほんと?」などのあいづち的発話は先行する発話の繰り返しによる確認、またはそこから導かれる結論を確認する<確認の注目表示>機能を持ち、それに対する「うん」のようなく同意の注目表示>がよく観察される(ザトラウスキー1993:70)」と報告している。実際、「そうなんだ」の次の131BFの「うん、ほんと」の反応からも130SFは相手に確認を取っていることが窺える。さらに、メイナード(2009:101)は意図的に相手に向けた表現ではなく、半分自分に向けた内面のつぶやきに近いものである場合、「そうなんだ」を「そうなんだす」の形式にするのは不自然であるという。130SFの「へー、そうなんだ」は「へー、そうなんですか/そうなんですか」など、相手を意識した表現にしても会話の流れは不自然にならない。その次に続く131BFの「うん、ほんと」も「はい、ほんとうです(よ)」と置き換えられることから聞き手SFの意図を伝達しようとしていると解することもできて、独話的であると断定することはできない。

さらに、132SFの「いいなー」の普通体あいづち表現は、「スウェーデン語ができる」という情報に対し、「(うわ、すごいです)いいなー」と相手に伝達の意図を持っているとも受け止められるし、「(私もそうなれたら)いいなー」のように、ただ相手に伝達する意図を持たずに、発話時に自分が思ったことや心情を表出する独話的なものであるとも考えられる。

ここで、普通体あいづち表現の相手を意識しない独話的用法と相手を意識する伝達的用法の存在を確認した上で、普通体を使っているBFと同じスタイルを選んでいるSFの発話に注目したい。128SFの「～少しでもできるんですか?」と丁寧体を選んでいたSFは、その次に続く129BFの「～忘れちゃった」の普通体に合わせ、130SF、132SFでは「そうなんだ」「いいなー」という普通体あいづち表現を選んでいることが分かる。こういった傾向は石黒(2013:105)で紹介した「相手との親しさを示すために、聞き手の使っている言葉に同調させ、そこに自分の言葉を拘束させていくアコモデーション理論(Giles et al. 1991)」からその背景が考えられる。SFは親しさを示す有効な手段として普通体あいづち表現を使っていることが窺える。

6. まとめと今後の課題

本稿では、非母語話者の日本語コミュニケーションの向上のために、現実の母語話

者のコミュニケーションを観察することが重要であるという観点に立ち、その一例として、初対面 20 代の同性同士を対象に、同等対話相手、目上対話相手といった対人関係におけるあいづち表現の使用について分析し、その特徴を次のように明らかにした。

まず、丁寧体と普通体のスタイルの対応があるあいづち表現の場合から見てみたい。

- i. 同等対話相手のあいづち表現使用には次のような特徴がみられた。同等女性同士の場合は、「うん」系、「そう」系などによる感性的普通体あいづち表現の使用により相手と良好な関係を保つために仲間意識を示し、相手との心的距離を縮めようとするのが窺えた。また、同等男性同士の場合は「はい」系、「ええ」系、「そうです」系などによる丁寧体あいづち表現を多用することにより、相手との距離を保持し丁寧さを保とうとすることが確認できた。同等対話相手のあいづち表現の使用傾向には性別による、選択されるあいづち表現には違いがあるものの、円満な対人関係を維持するために用いられる言語行動であるという点では共通していることが明らかになった。
- ii. 年配対話相手に対するあいづち表現の使用においては、次のような特徴がみられた。女性の場合、「うん」系や「はい」系、「ええ」系の感性的あいづち表現が多用されていた。また、男性の場合、「はい」系、「ええ」系や「そうです」系の丁寧体あいづち表現に集中して多用されていることが明らかになった。

次に、丁寧体と普通体のスタイルの対応がないあいづち表現の場合を見てみたい。

- iii. 「あ」系や「ふーん、へー、ほー…」など、意味内容のない感性的あいづち表現の使用が目立った。親密な関係でより多く使われるこれらのあいづち表現を用いることで、相手との良好な関係を保とうとしていることが分かった。

実際、本稿で着目した聞き手言語行動である「あいづち表現」はこれまで日本語教育現場で教えられることが少なく、後回しにされてきた。²その理由は、定形化した文法項目などの言語形式すら定着していない学習者に、相手との対人関係にかかわる言語形式を導入すると、男女差・上下差・年齢差など複雑な要因が絡み、学習者の負担が大きくなり、混乱が生じるといった配慮があるのではないかと考えられる。

近年、日本語のコミュニケーション教育の方法として「作り物ではなく本物を使う、現実のコミュニケーションを観察する(品田 2012 : 148-155)」、「言語には使う者の年齢相応の表現があり、世代の異なる教師が使う日本語をそのまま学習者に強いることは避けなければならない(メイナード 2005 : 15)」、「大学生くらいの若者にも男女差が依然としてある、適切なコミュニケーションのためには、話しことばの男女差を知っていることは必須(2006:50)」、「母語話者の自然談話を素材とする「自然会話」の教材化(宇佐美 2012 : 80 - 81)」など、説得力のある提言がなされている。

本稿で明らかにした対人関係によるあいづち表現の選択様相も、現実の母語話者の自然談話という本物から得られた、会話参加者の性別や社会的地位の上下(年齢の上下)を考慮した上で把握されたものである。本稿で確認した次の図 4 のような結果は、

²最近、実践的なコミュニケーション指導を目指す教科書では、学習項目として取り上げられているようである。

何(シラバス)を教えるかを考える際に参考になるであろう。特に20代の日本語母語話者が現実で使用しているあいづち表現を同年代の学習者も使い分けができるようにするのは、日本語教育における一つの学習目標でもであろう。

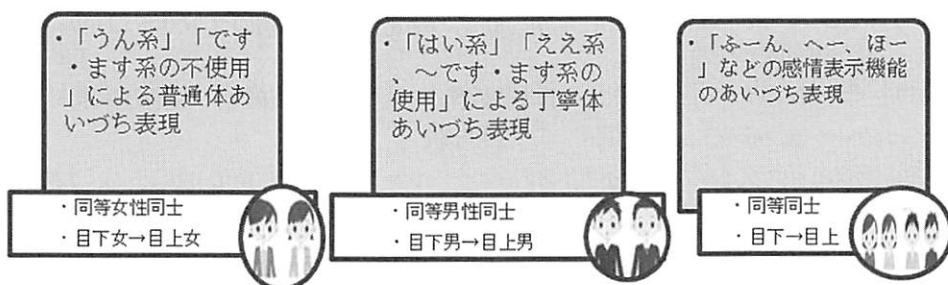


図4 あいづち表現のシラバス作成時の参考事項

今回の結果をどの学習段階でどのように教えるか、研究を具体的に反映した教材作成にも今後取り組んで行く必要がある。そのため、母語話者の範囲を大学生・大学院生に限らず、社会人などに広げてさらに分析を進める必要があろう。今回は、感性的丁寧体あいづち表現として「はい」系、「ええ」系を一まとめにして使用数をカウントしたが、実際には、「ええ」は「はい」に比べて使用頻度がかなり少ないことが分かった。余談ではあるが筆者は「30代に入ってから「ええ」を使うようになった」という話を耳にしたことがあり、あいづち表現にも世代差が存在するようである。これについては今後の課題としたい。

参考文献

- 石黒圭(2013)「日本語が「空気」が決める - 社会言語学入門 -」光文社新書
- 李舜炯(2014)「韓国語母語日本語学習者の聞き手言語行動一段階別聞き手言語行動のシラバス設計に向けて」『日語日文学』63輯, pp. 75-92, 大韓日語日文学会
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662, pp. 27-42, 昭和女子大学近代文化研究所
- _____ (2001)「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」『語学研究刊論集』6, pp. 1-29, 東京外国語大学語学研究所
- _____ (2006)「ジェンダーとポライトネス—女性は男性よりポライトなのか?—」『日本語とジェンダー』pp. 21-37, ひつじ書房
- _____ (2011)『改訂版基本的な文字化の原則(BTSJ)2011年版』
- 大塚容子(2013)「初対面3人会話における文体シフトの効果—「ディスコース・ポライトネス」の観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要. 外国語学部編』pp. 17-27, 岐阜聖徳学園大学
- 大浜るい子(2002)「相づち使用と対人関係」『広島大学日本語教育研究』12, pp. 1-9, 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座

- 小川早百合(2006)「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識」『日本語とジェンダー』pp. 3
8-51, ひつじ書房
- 窪田彩子(2000)「初級・上級日本語学習者のあいづちの習得—「あいづち」の待遇性に着目して—
『2000年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 104-109, 日本語教育学会
- ザトラウスキー、ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』
くろしお出版
- 品田潤子「コミュニケーションのための日本語教育の方法」野田尚史編『日本語教育のためのコ
ミュニケーション研究』pp. 147-166, くろしお出版
- 渋谷勝己(2008)「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『言語』37-1, pp. 18-25, 大修館書店
- 杉戸青樹(2007)「日本語社会における言語行動のバリエーションと日本語教育」『日本語教育』134,
pp. 18-27, 日本語教育学会
- 鈴木睦(2007)「言葉の男女差と日本語教育」『日本語教育』134, pp. 48-57, 日本語教育学会
- 高木裕子・丸山敬介(2007)「日本語教育におけるバリエーション教材と教育」『日本語教育』134, p
p. 68-79, 日本語教育学会
- 内藤真理子(2003)「あいづちのスピーチレベルとそのシフトについて—日本語母語話者と韓国語学
習者の相違—」『世界の日本語教育』13, pp. 109-125, 国際交流基金
- 堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手言語行動」『日本語教育』64,
pp. 13-26, 日本語教育学会
- 松田陽子(1988)「対話の日本語教育—あいづちに関連して—」『日本語学』7-13, pp
59-66, 明治書院
- 水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』7-12, pp. 4-11, 明治書院
- 三牧陽子(2002)「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話にお
ける社会的規範と個人ストラテジーを中心に—」『社会言語科学』5-1, pp. 56-74, 社会言語科学
会
- メイナード, 泉子K(1993)『会話分析』くろしお出版
_____(2009)『ていうか、やっぱり日本語だよ。』大修館書店
- 吉岡泰夫(2004)「コミュニケーション意識と敬語行動にみるポライトネスの地域差・世代差—首都
圏と大阪のネイティブ話者比較—」『社会言語科学』7-1, pp. 92-104, 社会言語科学会
- 吉田茂晃(1988)「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15, pp. 46-56. 神戸大学文
学部国語国文学会
- Brown, P., and Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Use*
ge. Cambridge: Cambridge University Press. [田中典子監訳『ポライトネス言 語使
用における、ある普遍現象』2011 東京: 研究社]
- Ide, S and McGloin, N. H. (1991). *Aspects of Japanese Women's Language*. Kurosio
Publishers, Tokyo.
- 이순형(2011)「사회언어적능력의 관점에서 본「본문화화」의 실제와 과제」『東北亜文化
研究』27, pp. 499-516, 동북아시아문화학회[李舜炯(2011)「社会言語的能力の観点から
みた「本文会話」の実際と課題」『東北亜文化研究』27, pp. 499-516, 東北亜細亜文化学会]
(い すんひょん・首都大学東京大学院 博士後期課程)